The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	モンテーニュにおける「他者描写」の方法的意義 : カエサルの場合
Author(s)	徳永, 雅
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1996, 30, p. 77-89
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47867
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

モンテーニュにおける「他者描写」の方法的意義

——カエサルの場合——

徳永　雅

『エセー』の題材は、その序文「読者へ」に言明されているように、著者モンテーニュ自身であり、モンテーニュは、自己を描くという行為を通して人間全般の本性を探究したことにより、モラリストの祖とされている。しかし同時に『エセー』には、優に一千人を越える他の人物に関する様々な記述が存在する。前稿では[1]、「自己描写」という方法を支える「気質」と「ありよう」という観点が、「自己描写」開始以前の、ギリシア・ラテン等の書物を読む行為を通して「他者」を把握しようとする段階で、既に確立していたことを明らかにし、また、「他者」について考察し描くという行為を、ヴィレーの「自己描写」に倣って「他者描写」と名付けた上で[2]、モンテーニュ自身がキケロについて記述する場合にも、実際にキケロの「気質」と「ありよう」が描写されている顕著な例を示し、分析を行った。本稿では、やはり『エセー』に数多くその名が記されているユリウス・カエサルに関して、全ての記述を体系的に分類し、その内容をモンテーニュが用いた文献と比較しつつ、モンテーニュにおける「他者描写」の方法的意義を明らかにしてみたい。

I

『エセー』に「カエサル」という語が記されているのは115回であり、

これは人名としてはプラトンに次いで2番目に多いものである[3]。このうちユリウス・カエサルという人物そのものに関わる記述を主題別に数えると68回となる[4]。これらの記述は、前後の文脈の中でどのような位置を占めているのであろうか。『エセー』においてギリシア・ローマの人名が記される場合、その最も多くは他の書物から借用した引用や例であり[5]、カエサルに関しても、事例としてカエサルの行為や言葉が引かれているケースが、68回中43回見出される。ピエール・ヴィレーは、『エセー』の執筆開始当初に数多く見られる事例の列挙を、当時流行していた「ルソン」《leçons》（古代の哲学者などの説を寄せ集めて注釈を施したもの）と同様のものと見做し、「自己描写」が始まるまでの没個性的段階と捉えている。また、晩年に再び増大する引用や借用についても、流行への追随に逆戻りした、何ら個性的でないものと断じている[6]。しかし果たしてヴィレーの言うように、事例としての記述にはモンテーニュの個性は表れていないのであろうか。また一方で、事例以外の記述も25回見出される。それらはどのような記述なのであろうか。このような観点のもとにカエサルに関する全ての記述を分析すると、次に示すような分類が可能であることが明らかとなる。以下この分類に従ってそれぞれの記述の例を示し、事例としての記述についてはその典拠と比較しながら分析を行ってゆく。

A　事例としての記述　　1）命題から事例へ・・・・・・・9回
　　2）事例から意見へ・・・・・・・6回
　　3）命題から事例さらに意見へ・・11回
　　4）事例のみ・・・・・・・・・・9回
　　5）「自己描写」から事例へ &
　　事例から「自己描写」へ・・・8回
　　（計43回）

B　事例以外の記述　　1）喩えとして・・・・・・・・・15回

2）個人的見解・・・・・・・・・・7回

3）「自己描写」の一環として・・3回

（計25回）

A．事例としての記述

1）　命題から事例へ　第1巻第36章「着物を着る習慣について」では、人間は可能なことを習慣によって不可能にしているという命題が示された後、それとは反対に不可能を可能にした人々の例が列挙されてゆく。その中に「(A)カエサルは、スエトニウスによれば、常に部隊の先頭を進み、たいていは徒歩で、日が照っていても雨が降っていても帽子をかぶらなかった。」（p. 226[7]）という記述が見られる。これは、モンテーニュによって明示されているように、スエトニウスの一節「行軍において、彼は部隊の先に立ち、時々は馬で、たいていは徒歩で、日が照っていても雨が降っていても帽子をかぶらなかった」を典拠としており[8]、その内容及び表現はほぼ一致している。スエトニウスでは、「カエサルは武術と馬術に秀で、信じられないほどの忍耐力を持っていた」という一文の後に記された、カエサルの忍耐力を表す具体例としての上記の一節を、モンテーニュは自らの考えを例証するために巧みに借用していると言える。

2）　事例から意見へ　第2巻第4章「用事は明日に」では、ルスティクスがプルタルコスの講演を聞いている最中に皇帝からの手紙を受け取ったが、講演が終わるまで開封しなかったという例、ブティエールという人物が、偉い人物と食事中だったために謀叛を知らせる手紙を読むのを延ばし、城を失うところであったという例、テーバイの僭主アルキアスが、自分の殺害計画について書かれた手紙を、食事中であったために「用事は明日に」と言って開封しなかったという例、それらとともに、「(A)プルタルコスは私に、ユリウス・カエサルは、もし殺された当日元老院に行く途中で渡された紙片を読んでいたら助かっただろうということを教えてくれた」（p.

364）と記されている。この一節は確かにプルタルコスを論拠としているが、プルタルコスは、人名を挙げつつその状況を詳しく説明し、また他の説も示しており、モンテーニュの一節との記述上の差異は大きい[9]。つまり、ここではモンテーニュのおぼろげな記憶によって、逸話の核となる部分だけが述べられていると言える。その後、ルスティクスのように他人のために自分に来た知らせを聞くのを延ばすのは良いことだが、自分一人の利益や快楽のためにそうすることは許すべからざることだ、という著者の見解が述べられる。すなわちこれらの事例は、帰納法的に著者の意見を引き出す役割をしているのである。

3）命題から事例さらに意見へ　この事項に関しては次章で論じる。

4）事例のみ　著者の意見が全く示されず、ただ事例のみが列挙されている例も見出される。第1巻第47章「我々の判断の不定なことについて」の1588年以降の加筆部分では、「(C)アレクサンドロスとカエサルとルクルスは戦争に、豪華で輝くばかりの特別な色の装束と武具をつけて目立つことを好んだ。アギスとアゲシオラスとあの偉大なギリッポスは、反対に目立たない服装をして、大将の飾りをつけずに戦場に赴いた」（p. 284）という例が示される。カエサルに関しては、スエトニウスの「カエサルは部隊の装備に心を配り、彼らに金や銀で飾られた武器を与えたが、それは目を引くためだけでなく、それらを失うことを恐れてよりよく戦うよう、彼らをかり立てるためであった」[10]という一節などを典拠としていると思われる。2つの相反する行為について、ここでは著者の見解は全く示されないが、これらの人物名を挙げるための膨大な知識量と整理力は特筆すべきものである。また、この一節は章題である「我々の判断の不定なこと」を示す例証となっている。一見、単なる事例の蒐集とも見做されるこのような記述も、モンテーニュが常に意識していた事物の「多様性」を表すという点では、極めて個性的な記述であるといえよう[11]。

5）「自己描写」から事例へ　第2巻第17章「自惚れについて」では、著者が自分自身について語っている一節で、自分は偉そうな威張った物腰や身振りがあると人に言われるが、ある性状や傾向が自分のものになり切り、意識せずに癖が身についてしまうことはよくあることだと言った後、いくつかの例が列挙される。

> Ⓐアレクサンドロスに頭を少し片方に傾けさせたのも、アルキビアデスの話し方を弱々しく舌足らずにしたのも、その美しさに合う一種の気取りのせいであった。ユリウス・カエサルは一本指でよく頭を掻いたが、それは面倒な考えで頭が一杯になった人の仕種である。キケロは鼻に皺をよせる癖があったと思われるが、それは生まれつき、からかい好きであることを示している。(p. 633)

モンテーニュは自己を正当化するために、有名な人々の癖を、ユーモアを込めつつ並べている。カエサルに関する典拠はプルタルコスの「キケロは〔中略〕（カエサルが）あのように美的に髪を整え、一本の指でそれを引き掻いているのを見ていると、この男がローマの政体を転覆させようなどという悪事を心に抱くことができたような人物とは思えないと付け加えた」にあると思われる[12]。プルタルコスの文脈においては「一本の指で頭を引き掻く」仕種は、「美的に髪を整える」仕種と同列に置かれ、「悪事を心に抱く」ことと対照的に述べられているが、モンテーニュはそれが、「面倒な考えで頭が一杯になった人の仕種」であるという、独自の解釈を加えている。またここでは、古代の偉人が身近な存在として、日常的な感覚のもとに描写されており、コンパンが指摘しているように、「他者」に対するこのような主観的アプローチの仕方に、モンテーニュの特徴が表れていると言えよう[13]。このように「自己描写」からカエサルの事例に移行したり、また逆に事例を示した後「私の場合は…」と「自己描写」が始ま

る例も見出される[14)]。

以上考察してきたように、カエサルに関する事例としての記述は、文献をそのまま引用したり、要約したり、記憶の範囲で借用したりしながら、ある時は著者の命題を例証し、またある時は著者の意見を帰納法的に引き出し、或いは、様々な例を列挙することで事物の「多様性」を表し、或いは『エセー』の特徴とされる「自己描写」から導き出されたり、反対に「自己描写」を導き出すという働きをしていた。そしてカエサルの外見や行為などを記述しつつ、モンテーニュの視線が常にカエサルという人間に向けられ、そのときどきに応じて自己の判断を加えている様子が見てとれた。従って、事例としてのこれらの記述も、「他者描写」と呼ぶにふさわしい、モンテーニュの独自性を表した記述と言えよう。

B．事例以外の記述

1）　喩えとして　　第2巻第8章「親の子供に対する愛情について」でモンテーニュは、精神的産物が肉体的産物よりも価値があると説いた後、「(A)アレクサンドロスやカエサルが、跡継ぎの子供を持つという利点のために、たとえそれがどんなに完全で立派な子供であっても、それと引き換えに、彼らの偉大な輝かしい武勲を奪われることを一度でも望んだなどとは考えられないことである」（p. 402）と言っている。この文の意味するところは、「偉大な輝かしい武勲」という精神的産物は「子供」という肉体的産物よりも価値があるということであり、「偉大な輝かしい武勲」を残した代表的将軍としてアレクサンドロスとカエサルが挙げられているのであるが、それは実例ではなく、あくまでもモンテーニュの主観的思考によって引き合いに出された例、喩えである。このような記述は、偉大な武将の代表として選択したという行為そのものにおいて、カエサルに対するモンテーニュの個人的見解を潜在的に表した記述であると言える。

2）　個人的見解　　第2巻第34章「ユリウス・カエサルの戦争の仕方につ

いての考察」では、書物からの引用などの事例なしに、カエサルに対するモンテーニュの個人的見解が述べられている箇所がいくつか見られる。カエサルとアレクサンドロスの比較を行っている箇所を見てみよう。

> (A) 私はカエサルのほうがアレクサンドロスよりも少し、事を行うのに慎重で思慮深いと思う。というのもアレクサンドロスは、出合うもの全てに見境なくぶつかる奔流のように、危険を求めて力任せに走っているように思われるからである。〔中略〕また，アレクサンドロスはより血の気が多く、怒りっぽく、激しい気性である上に、その気質を酒でさらにかき立てたが、カエサルは非常に節制家であった。
> (pp. 739–740)

ここでは、書物からの引用というレベルを越え、モンテーニュは、諸文献から得た知識によってカエサルとアレクサンドロスという2人の人物像を自己の思考の中に構築し、主観的判断のもとに比較している。

3)「自己描写」の一環として　次の例は、第2巻第10章「読書について」において、モンテーニュが自己の読書論を展開している中の一部分であるので、所謂「自己描写」の記述と捉えるべきであろう。

> (A) カエサルは特に研究に値するように思われる。単に歴史を知るためばかりでなく、彼自身を見るためにもそうである。それほどに彼は、他の全ての歴史家〔中略〕をしのぐ完全さと秀逸さをもっている。確かに、私はこの著者を、人間の書いたものを読む時よりも、いささか多くの畏敬と尊敬の念をもって読む。ある時は、彼の行為と奇蹟的な偉大さを通して彼自身を考察しながら、またある時は〔中略〕彼の言葉の純粋さと、比類のない優美さを考察しながら読むのである。
> (p. 416)

モンテーニュは1578年2月25日から同年7月21日にかけてカエサルの『ガリア戦記』と『内乱記』を読破しており[15]、ここには、カエサルの著者としての卓越さが、大袈裟ともいえる表現によって記され、モンテーニュのカエサルに対する傾倒ぶりが表れている。また、これまで我々は、モンテーニュがカエサルの行為や言葉を記述しながら、常にその人間としてのありようを探究している様を解明してきたが、この一節は、モンテーニュが意識的に、自覚をもってカエサルという人間そのものに目を向けていることを証明している。

カエサルに関する事例以外の記述は、以上に見たように、喩えとしての記述、著者の個人的見解を述べた記述、「自己描写」の一環としての記述に大別されるが、いずれもモンテーニュの個人的な考えが色濃く表れており、極めて個性的な記述であると結論づけることが出来る。

II

次に、命題からカエサルに関する事例、さらに意見へという構成が顕著に見出される第2巻第33章「スプリナの話」を考察する。この章は「ユリウス・カエサルの戦争の仕方について」の直前に位置する章であり、その題名に反して、スプリナに関する記述の約20倍以上の量がカエサルに関する記述に割かれている。またここにはスエトニウスからの引用が数多く見出され、その論出順序も類似している。両者を比較しながら、モンテーニュの「他者描写」の実例を分析してみたい。

章の冒頭、恋愛の欲望ほど激しいものはないという説に反論し、恋愛の欲望を抑制した人々の事例が列挙された後、「(A)野心や吝嗇などのように、まったく精神の中にだけある情欲は、理性にとってはいっそう手強いものである」（p. 729）という命題が示され、次のように続く。その典拠となっているスエトニウスの記述と比較してみよう。

(A) これらの欲望の相違を示すには、ユリウス・カエサルの例だけで十分であろう。というのもこれまでに彼ほど恋愛の欲望にふけった者はいないからである。容姿に対する手入れの熱心さがその証拠である。彼はそのために、全身の毛を抜かせたり、極めてめずらしい香料を塗らせるなど、当時行われていた最も淫蕩な方法を用いさえした。それに、もともと美男子で、色が白く、美しくすらりとした体つきで、ゆったりとした顔つきをしており、目は褐色で生き生きとしていた。ただしこれは、スエトニウスの言うところを信じてのことである。(p. 729)

〔モンテーニュ〕

言われているところによれば、カエサルは背が高く、色は白く、手足の形がよく整い、顔は少しふっくらしており、目は黒く生き生きとしていた。死ぬ少しまえ頃時々突然失神状態に陥ったり、悪夢に悩まされた以外は健康であった。遠征中二回癲癇の発作に襲われたことがある。容姿の手入れにこだわりすぎで、頭髪を刈り込み、髭を注意深く剃るばかりでなく、体の毛を引き抜かせたりして一部のものから非難されていた[16]。

〔スエトニウス〕

モンテーニュは、カエサルが恋愛にふけった証拠として、身体の手入れの熱心さについてのスエトニウスの記述を借用し、さらにその直前に書かれているカエサルの容姿の美しさについて引き続き記している。恋愛の欲望がテーマとなっているため、癲癇などに関する部分が脱落しているのは当然と言えるが、自分の論理に従って、都合の良い所だけを自分の表現に置き換えて記述している様が見てとれる。

次にカエサルの女性遍歴が次々と語られてゆくが、7例全てがスエトニウスの記述を要約したものである[17]。それらの例を挙げた後、「このようなわけで、私が彼をこの放蕩にとことん耽った、極めて色好みの人と見做

すのも当然であると思う。しかし、野心というやはり彼を骨の髄まで蝕んでいた情欲がこの愛欲と争うと、即座に愛欲からその地位を奪ってしまうのである」（p. 730）という、スエトニウスには見られない、かなり独断的な見解が示される。さらに、「私はこの人物の偉大さと彼の素晴らしい特質を考えると、〔中略〕彼の野心が残念である」（p. 731）というモンテーニュの個人的な意見が提示される。

次にカエサルが「節制家」であり、「温和」で「寛容」であったことが、やはりスエトニウスからの引用をほぼそのまま用いつつ論じられ[18]、その最後に、「これまで彼ほど勝利の中に節制を守り、不運の中に果敢を示した者は決していない」（p. 733）というモンテーニュによる総括がなされる。しかし再び、「けれども、これらの全ての美しい傾向も、この野心という狂おしい情念に台無しにされ、息の根を止められ、あらゆる行動の舵を握られたと言えるほど完全に引き回された」（p. 733）と言い切り、その後カエサルの野心を示す行為が4、5例挙げられることになる。スエトニウスにおいても、カエサルの美徳が述べられた後、「しかしそれ以外の彼の言動の方が人物評価において優位を占めており、彼は権力を乱用したとか、暗殺されたのも当然だと見做されている」[19]という書き出しの後、その例が列挙されているが、しかし「見做されている」という表現に顕著なように、スエトニウスはあくまでも一般の見解を伝えるのみで、彼自身の判断は一切付け加えていない。それに対しモンテーニュは、再三にわたってカエサルの「野心」に関する辛辣な意見を述べ、この章におけるカエサルについての記述を次のように締め括っている。

(A) 要するに私の考えでは、このただ一つの悪徳（野心）が、彼の中のかつて存在した最も美しく、最も豊かな資質を滅ぼし、あらゆる正しい人々に彼の思い出をいまわしいものにしたのである。何故なら祖国

を崩壊させ、世界がかつて出合った最も強大で最も栄えた国家を破滅させて、自己の栄光を求めようとしたからである。(p. 733)

カエサルの恋愛に関しても、美徳に関しても、悪行に関しても、事例はほとんど全てスエトニウスのものを、ほぼ順番通りに借用して記述しているが、モンテーニュは最初と半ばと最後にカエサルの「野心」に関する独自の見解、それもかなり批判的な見解を述べており、あくまでも「野心」という観点を軸にカエサル像を描写していると言えよう[20]。この章に見られる数々の事例は、モンテーニュの個人的意見の枠内に組み込まれているのであり、没個性的とは割り切れない、著者の見解を示す上で極めて意義深い記述となっている。

モンテーニュはカエサルについて、多くは事例として記述しているが、その典拠となっている記述と比較するならば、そこには単なる事例の蒐集という枠組みを超越した、主体的操作が作用していることが明らかとなった。また事例以外の記述においては、個人的見解など、さらに個性的な記述を読み取ることができた。モンテーニュはカエサルに対して、この上ない賛美と厳しい批判を同時に行っているが、それは、彼がギリシア・ローマの文献を読むという受動的行為においても、『エセー』を書くという能動的行為においても、常にカエサルという人間そのものに目を向け、自分自身の判断の「試し」《essai》を続けた結果と言えよう。「他者描写」は「自己描写」に劣らず、その様々な側面においてモンテーニュの個人的世界を表現する「個性的」な記述なのである。

注

1) 拙稿「モンテーニュにおける「他者」の把握と「他者描写」の実例――キケロの場合――」in *GALLIA*, N°35, 1995, pp. 1–8.

2) Prierre Villey, *Les Sources et l'Evolution des Essais de Montaigne,* (Hachette,) 1908, 2 vol 及び、拙稿 "L'évolution de l'idée de《vertu》chez Montaigne —— La signification de la《peinture d'autrui》——" in *Etudes de Langue et Littérature françaises,* N° 64, pp. 3–15 参照。ヴィレーは、モンテーニュの《peindre》という語を受けて、「自己描写」《la peinture du Moi》という用語を定着させたが、その内容を「自画像」「性格や好み」「経験による意見」に分類しており、この場合「描写」とは、一般に想起されるレアリスム的描写とは異なる。論者が名付けた「他者描写」という用語も同様に、「他者」の外見、思考、行為などに考えをめぐらせ、それらを記述するという、極めて広範囲な意味範疇を持つ。

3) Roy. E. Leake, *Concordance des Essais de Montaigne,* (Droz,) 1981, t. I, p. 201 参照。

4) 115回のうち2回はアウグストゥス・カエサルについてであるので、ユリウス・カエサルについては113回となる。また、7回に関しては、「カエサルの兵士」など、他の人物が問題となっており、25回に関しては「カエサルの内乱の時に」、「カエサルに対する陰謀」など、カエサルという人間に関わる記述ではなく、また2回は章の題名に含まれるものである。従って、ユリウス・カエサルという人物そのものに直接関わる記述は79回となるが、このうち11回は同じ話題の中に名前が複数回記されているケースなので、テーマごとに計算するならば68回となる。

5) ヴィレーはエセーの構成要素として、《des réflexions pratiques, des citations et des exemples empruntés, des expériences des impressions personnelles》の3つの側面を挙げている。Villey, *op. cit.,* II, p. 274 参照。

6) Villey, *op. cit.,* II, pp. 38–70 及びpp. 528–535 参照。

7) Montaigne, *Essais,* éd. Villey-Saulnier, (PUF,) 1965. 本文中括孤内に示すページ数は全てこの版のものであり、既訳を参照した上での拙訳である。尚、引用文頭の記号(A)は1572～80年の執筆部分を、以下(B)は1580～88年の執筆部分を、(C)は1588～92年の加筆部分を表す。

8) モンテーニュは1580年以前にローマの歴史家スエトニウス（69頃—140頃）の *XII Cæsares*『ローマ皇帝列伝』を読み、初版の『エセー』には約40ケ所の借用があるとされる。Villey, *op. cit.,* I, p. 222 参照。モンテーニュが用いたのはラテン語原典であるが、本稿では現代フランス語訳に基づく拙訳を示す。Suétone, *Vie de douze césars,* texte établi et traduit par Henri Ailloud, (Société d'édition《LES BELLES LETTRES》,)

1967, I, César, LXII, pp. 41–42.

9) モンテーニュはジャック・アミヨのフランス語訳によってプルタルコスの『英雄伝』を読み、『エセー』には合計140回『英雄伝』からの借用や引用があるとされる。Villey, *op. cit.*, I, pp. 198–200 参照。本稿では現代フランス語対訳の版を示しておく。Plutarque, *Vies*, texte établi et traduit par Robert Flancelière, (Société d'édition《LES BELLES LETTRES》,) 1975, IX, César, 65, p. 216.

10) Suétone, *op. cit.*, LXVII, p. 46.

11) 竹田英尚、『モンテーニュ　思考と作品の様式とその進化』、(白水社、) 1989, pp. 35–49 参照。また、第1巻第48章「軍馬について」では、軍馬に関する様々な逸話が次々と語られる中に『ガリア戦記』からの引用が行われているが、特にモンテーニュ自身の意見や主張は見出せない。このような場合、事物の「多様性」を表すというよりはむしろ、寺迫氏の指摘しているように、「無償の楽しみ」として稀有な話を鑑賞する姿勢が見られる。寺迫正広、「Essais における事例蒐集の意義」、『フランス語フランス文学研究』N° 39, 1981, pp. 1–10 参照。いずれにせよ、極めてモンテーニュ的な記述であると言える。

12) Plutarque, *op. cit.*, 4, p. 149 拙訳。ヴィレーはこの典拠を *ibid.*, 1 としているが、そこには同様の記述は見られない。*Essais*, p. 1297 参照。

13) Jean-Marie Compain, "Montaigne, admirateur de J. César?" in *Montaigne et l'Histoire*, (Klincksieck,) 1991, pp. 70–71.

14) Essais, p. 288 など4ケ所では事例から「自己描写」に移行している。

15) シャンティイー図書館にはモンテーニュのサインと注釈が書き加えられたラテン語原文の版が所蔵されており、巻の冒頭にこの日付が記されている。Villey, *op. cit.*, I, pp. 90–92 参照。

16) Suétone, *op. cit.*, XLV, p. 32.

17) *Ibid.*, XLIX-LII, pp. 34–37.

18) *Ibid.*, LIII-LXXV, pp. 37–51.

19) *Ibid.*, LXXVI-LXXVIII, pp. 51–55.

20) キケロに関しても、モンテーニュはその「野心」を痛烈に批判している。「野心」は彼が意識的に遠ざけた情念と言えるかもしれない。注1参照。

（大学院後期課程学生）